Osaka University Knowledge Archive

Title	〈書評〉臨床仏教研究所編　『社会貢献する仏教者たち　ツナガリ社会の回復に向けて』
Author(s)	泉, 経武
Citation	宗教と社会貢献. 2013, 3(2), p. 49-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26028
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書評

臨床仏教研究所編
『社会貢献する仏教者たち　ツナガリ社会の回復に向けて』
白馬社、2012 年 6 月、四六判、293 頁、1800 円+税

泉　経武*

本書は、臨床仏教叢書 1『なぜ寺院は公益性を問われるのか』に続く第 2 である。第 1 部で、2010 年「第 1 回仏教教化事例発表大会」での教化活動の 18 事例が報告され、第 2 部で研究報告がまとめられる。本書によると、臨床仏教研究所は、2008 年に設立された、財団法人全国青少年教化協議会に付属する教育機関である。

第 1 部での報告は、宗派を特定せず多くの宗派からなされている。宗派教義に基づく教化活動も含むが、報告の大半は教育活動で、知的な活動から体験型の活動まで幅広い。てらこや塾や日曜学校など学習教育支援では、日本人の児童や青少年、成人の他に、外国人・留学生をも対象にしている。食生活の見直しや情操教育、生涯教育などの活動が紹介される。ベトナムやネパール、ミャンマーへの海外支援や農園活動のほかに、ネットを活用した悩み相談などもみられる。これらは、従来寺院や僧侶が行う宗教活動としては考えられることがほとんどなかった活動ばかりである。寺院の社会的位置づけの変容や、僧侶に向けられる静かなる期待に応じた動向の表れとみることができよう。

第 1 部での報告事例は多岐にわたる。日本全国ですでに活動を展開している寺院や活動の計画中の寺院が、これらの報告から自由に情報を得ることができる便はあろう。しかし、このような状況が生じた歴史的背景や共通する課題など、編集者による諸活動の分析や情報の整理があれば、さらに読者の助けになったであろうと思われる。

第 2 部では、9 つの研究論文がまとめられている。斎藤明俊は「「つながり」の社会に生きる」で、現代の豊かさの再考、長寿社会の課題、老いとの向き合い方について触れ、つながりなき社会で現代人が生きることは不可能であり、つながりを再考・再生させるために慈悲の精神に立ち返り、その実践の必要をまとめる。島園進は「仏教者による社会活動の可能性」

---

* 所属なし。

で、江戸以降の寺院と僧侶の社会的な位置づけを確認し、特に近代化が都市化を推し進め、伝統教団の支えであった地域社会や家族・親族関係の拡散が寺院の役割を縮小させ、信仰活動と社会活動は別物との流れができたが、20 世紀の終わりにかけ、信仰と社会問題は切り離しがたいものとみなし、社会活動に積極的に関わる寺院と僧侶の変化とその可能性を言及している。渡邊寶陽は「仏教教化事業を支える諸師に賛辞を贈る」で、2010 年開催の第 1 回仏教教化事例発表大会での基調報告や分科会での報告を取り上げている。石上善應は「仏教者の自己と他者の関わり」で、仏教者の社会活動を仏教福祉とみなし、その基盤が慈悲の精神でなければならないことや、仏陀が苦行を捨て慈しみの心を習得した経験を現代の仏教者は追体験するべきことを説く。山崎龍明は「かかわりあうことの煩わしさと尊さーかかわりの中で人は成長する」で、仏教界が抱える問題の現状と打開策を論じ、仏教者自身による自己反省を強く促す。寺院や僧侶に向けられている批判は、仏教に対する期待があればこそとの認識に立ち、これを好機となすためにも仏教者自身の自己変革を訴えている。小谷みどりは「「個」の尊重と社会の無縁化」で、種々の統計を用いて現代人の生活環境を分析し、豊かな人間関係こそが社会をよりよく変えることを可能にすることをまとめる。鈴木晋怜は「スピリチュアルなつながり」で、現代人の志向する宗教がスピリチュアリティーとしての形態であり、そこに潜む危険性を明示し、伝統教団の僧侶の課題について言及する。ジョナサン・ワッツと戸松義晴は「台湾の「公共的仏教」 - 終末期ケアのための臨床仏教運動」で、1960 年代以降の台湾仏教の復興運動の一環として始まった終末期ケアの活動についてまとめている。終末期ケアの現場で、病院医師と僧侶が仏教を現実的に生かすまでのプロセスが非常に興味深く描かれている。神仁は「死者と生者をつなぐグリーフ（悲嘆）ケア」で、極度の喪失体験による悲嘆の感情に襲われた人へのケアについて、近年の研究状況や自身の体験を踏まえて、今日の宗教者が自己の生死観や来世観を明確にしておく必要性を説く。

以下、拙い読後感を記してみたい。編を担当する臨床仏教研究所が、どのような読者を想定して本書をなしたかが明確でない。同様の感をお持ちの方は、島園論文を最初に読まれることをお勧めする。上記と重複する部分をお許しいただき、再度島園論文の日本の近代化以降の動向の要点をま

とめてみたい。

近代化により、経済活動の活発化、官僚の組織化、科学教育の導入が進み、世俗化・脱宗教化の流れが生じるが、都市化は民衆主体の下からの宗教活動を活発にした。この民衆主体の在家宗教運動は、集団の外に対して壁を作り、内側の私的領域で強固な団結を育み、その内側を拡張する布教形態をとった。一方で伝統教団は、支えとしてきた地域社会や家族・親族集団が都市化とともに拡散し結束力を弱めるに従い、寺院を基盤としてきた諸活動がその意義を失い始める。自ずと寺院の外側に向けて行われていた活動領域も狭くなり、宗教儀礼に特化した信仰活動が内側で行われるだけの、いわゆる「葬式仏教」の様相を呈するようになった。近年は、その葬祭でさえ急速に減少することが予想されている。このように、近代化に伴う社会変化によって、民衆主体であった在家仏教運動も、伝統仏教の寺院も、それを支える社会基盤が急激な変化にさらされたことによって、宗教集団としての内と外の壁が出来上がってしまった。しかし、20 世紀終盤に、この内と外の壁を越えようとする変化がみられるようになる。内の信仰活動と、外の社会活動は、切り離しがたいものだとの認識に立ち、社会活動に積極的に参画する寺院や僧侶が現れた。こうした状況を島園は、内側のリアリティーの維持に困難が生じたことと、外（世界）との接触で自らを試みる機会が格段に増えたとみている。外に目を向けるようになった僧侶の活動は、社会的困窮者に対する生活面での物資供給など具体的な活動に止まらず、彼らの心のありようにまで触れ、それを支えようとする活動にまで進展している。このスピリチュアルな活動に宗教的意義を見出した僧侶らは、寺院内における信仰活動のリアリティーと、寺院の日常生活が社会からの孤立や排除の可能性の中にある現実に直面しているが故に、スピリチュアル活動で支援される側との間に同じ社会的境遇を見出し、交錯し合える接点が生じたのだと島園は分析する。筆者にとっては、内と外の壁が形成・強化されたかつての時代と、現在の内と外の壁を越えようとする動向までの流れが島園によって示されたことで、本書で紹介されている多くの活動や論文の内容が全体像をなす。

ただし、島園が論じた時期における僧侶や在家信徒のアイデンティティの変化については、まったく触れていない。本書の執筆者全てが、現在の惨状、人々の苦しみ、悲嘆の現場に立ち、自分の目でそれを直視し、その

人々に近づき、彼らの心情の深いところに寄り添い、理解と共感に努めている。私が知りたいと思ったのは、そうした僧侶らが、その時、あるいはその後に、彼らの内面で何が起きたのか、である。それを垢の付いた仏教用語や、第三者による評価を気にするような言葉に置き換えてもらいたくない。社会活動に踏み出す僧侶の姿も変化ではあろうが、それを己の「使命」とみなす内面の構え（神 p.264）も変化ではなかろうか。社会分析のための「内と外の壁」は、僧侶個人の生き方を決めるギリギリの地点の動きが捉えきれていない。

社会活動への関与がもたらす内面の変化に関して、おそらく本書執筆者はその関心を徹底させていなかったのではないかと思われる。それは、執筆者の自己表現に関して執筆者どうしで意見交換がなされた形跡がみられない。「僧侶」「仏教者」「宗教者」の自己表現が、あたかも執筆者の好みで記述されている点にそれが如実に表れている。執筆者各位が、宗派を同じくせず、個々の宗教信条の根幹に関しての意見交換が困難であることは想像できる。しかし、本書で紹介されているような社会活動を通じた現実への深い関与は、実践者の心身のありようを規定し、困難な現実に立ち向かう個々の経験を通じて自然（じねん）に形をなした言葉があるに違いないと考える。各宗派で教義と化した先師先哲の言葉も、本書で紹介されている社会活動に参画する僧侶と同じ現実経験の基に生まれてきたはずだからである。

論文では、仏教者の社会観の問い直しを含む仏教者自身の自己変革の必要性が述べられていた（山崎 pp.222‐225）。そして、その変革が錦の御旗にならないよう注意の要することにも触れている。この自己変革に伴う苦悩を仏教者が赤裸々に語った時、島園の言う外の人間である我々は、初めて彼らの言葉に同時代を生きる同じ人間の血潮を感じ取るに違いないと思う。

気に留めるほどではないのかもしれないが、我々は「装置」を装置たらしめるための存在ではないことを注記したい（p.81）。教化する側と教化される側の境界線の設定が、教化活動のためだけでなく、教化する側の自己確認・反省の材料でもあることを認識すべきではなかろうか。

最初から最後まで、どこから読み始めても、社会貢献のための活動に参加する僧侶の出現は、我々にとって嬉しい限りであることを痛感させても

らえる一書である。そうであればこそ、我々の視野にある僧侶への願いを込めて、なにか伝えるべきことがないかを私なりに思案した末の書評となった。タイにおける開発僧の動向との比較などが論じられるはずの書評依頼であったであろうが、自身の研究の進展が遅々としてまとまりをなさず、諸賢の期待を裏切ること、恥ずかしい限りである。